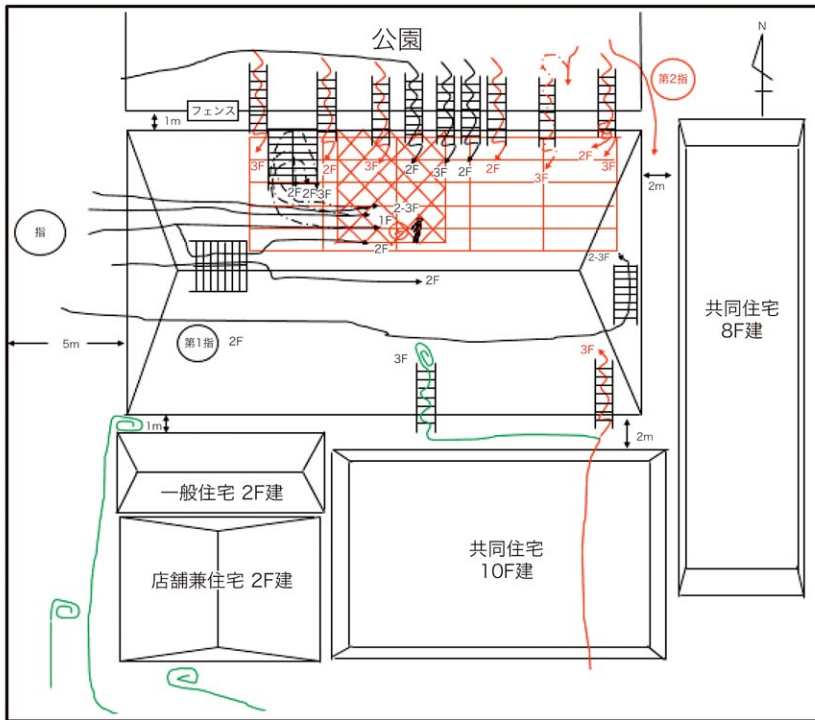


## — 防御図 —



直近部署後、早期に1階西側の正面玄関より、屋内進入したN消火隊は、燃焼室までホースを延長後、燃焼状態に向かって放水し火勢を制圧した。しかし、一度は鎮圧したかと思っただ火勢がすでに木造の天井部分から上階へと延焼していた。北側公園からも複数の小隊が放水活動を開始した。屋内進入したN小隊は延焼している1階部分、その後2階へと転進し、消火活動を実施するも北側からの放水によ

り、煙や熱が室内に押し込まれ、濃煙熱気により困難な活動を余儀なくされた。北側に要救助者がいて救出を開始していることは、無線で傍受していた。北側からの放水は要救助者を守るためのものだろう。N小隊長は、ここで自分たちが踏ん張らないとこの火事はさらに延焼してしまふ、そう覚悟を決め、勇猛果敢な消火活動を行い、西側及び南側への延焼を食い止めた。  
(防御図参照)

### 指揮班による消防隊の進入統制(局面指揮者の配置)

火災が拡大すれば、多数の消防隊が出場し、部隊を掌握することが困難になる。そこで必要となるのが、指揮班による部隊の進入統制や隊管理である。今回の火災では、2階の前進指揮を命ぜられたT小隊は、濃煙により活動隊を視認できないといった緊迫したなかでの活動であることに加え、建物への入口が3箇所、建物内部の階段が4箇所もあり、状況把握が困難であった。このような場合、各入口や階段における指揮班の配備が必要ではないだろうか。安全で効果的な活動には、各級指揮者間のさらなる連携や早期に特命指揮班の要請と適切な配置を考慮し、組織的な活動を展開する必要がある。しかし、それをもっても部隊の活動を把握できるとはいえない。肝となるのは、無線等の活用、また隊員を伝令とし、各級指揮者が配下の各隊と連絡を密にして連携を図ることで情報を共有することが重要となる。

### おわりに

【本件における活動ポイント】

- ・複雑な構造様式(見た目は鉄骨造だが、実際は一部分が木造)
- ↓屋内進入隊による構造把握と早期に危険エリア等の設定及びその情報共有

木造危険因子(天井・床の崩落)等エリア設定

- ・滞在人員(要救助者)が多数(全108室があり、出火時49名が滞在)
- ↓多数救助となり、人命救助優先ではあるが、並行した消火活動任務が必要
- 救出活動の緊急性を考慮、増強等の連携
- ・部隊活動の掌握(多数の出場隊: 消火隊18隊、救助隊15隊、救急隊8隊)
- ↓指揮班要請(任務別・活動階別・進入口別)

今後どう活かすか。一つひとつの現場を分析し、教訓とし、各々が次に繋がるよう知恵を絞らなければならない。自分たちの管内もしくは近隣において、こういった困難性のある条件下、類似した対象物における火災が発生した際にいつも通りの活動が果たしてどこまでできるだろうか。普段の警防調査・過去事例を活用したイメージトレーニング等いかに重要であるか、ということである。備えあって憂いなし、常に自分に自問自答を繰り返し、今後起こりうる災害に改めて今一度「備え(準備)」が必要であると考える。  
(文責 門馬)